

論文審査の要旨および学識確認結果

報告番号	甲 第 号	氏 名	安藤 真太郎	
論文審査担当者：	主査	慶應義塾大学教授	博士(工学)	伊香賀俊治
	副査	慶應義塾大学教授	学術博士	栗田 治
	副査	慶應義塾大学准教授	博士(工学)	岸本 達也
	副査	首都大学東京大学院教授	医学博士	星 旦二
	副査	北九州市立大学教授	博士(工学)	白石靖幸
(論文審査の要旨)				
<p>学士(工学)、修士(工学)、安藤真太郎君提出の学位請求論文は「住まい・コミュニティにおける健康決定要因の因果構造分析」と題し、8章からなっている。</p> <p>国民の健康長寿の実現のためには、個々人の健康に対する努力すなわちヘルスプロモーション（一次予防）を支援すると共に、参加活動意欲を促進する環境づくり（ゼロ次予防）が解決策として求められる。そのような背景から、本研究は、居住環境を包括的に評価し、因果推論に則った上での住まい・コミュニティの健康決定要因を明らかにし、適切な評価指針や提言に資することを目的としたものである。</p> <p>第1章では、序論として本研究の背景と目的について記している。</p> <p>第2章では、住まい・コミュニティにおける健康決定要因を探るにあたり、居住環境と健康に纏わる既往研究についてまとめる。住まいとコミュニティが健康に及ぼす影響とその機序の知見について述べ、これから明らかにしようとする因果関係の整合性について整理している。</p> <p>第3章では、因果推論について触れ、公衆衛生的理論に基いて住まいとコミュニティにおける健康決定要因を明らかにするための方法論について述べている。</p> <p>第4章では、有識者との協議やエキスパートジャッジを経て体系化した調査票を用いて、福岡県北九州市において断面調査を実施し、住まいとコミュニティ、そして居住者の実態を把握した。その結果を基に共分散構造分析を実施し、住まいとコミュニティと健康の3要素の複層的な関係性を“住宅・地域環境の健康形成要因構造モデル”を明示している。このモデルによって、住まい・コミュニティと健康の間の階層構造と健康への寄与率が22%であることを明らかにし、因果条件の「整合性」「妥当性」を確認している。</p> <p>第5章では、第4章で明らかとなった健康形成要因モデルが、他の母集団においても一貫して認められるか分析を行い、因果推論における「因果の普遍性」について検証している。北九州市の他、高知県梼原町と長野県小布施町のデータを用いて、健康形成要因モデルを構築し、その同意性や異質性について考察を行っている。</p> <p>第6章では、第4章の回答者に対して実施した追跡調査に基づいて、因果推論における「因果の時間的先行性」について検証している。住環境と健康状態のそれぞれについて、どちらが原因でどちらが結果であるかを因果効果モデルによって推論を行い、「社会支援環境」が「精神的健康」に因果効果を及ぼすことを示唆している。</p> <p>続いて、第7章では、WEB調査とフィールド調査の双方の活用によって、関係性に客観性を有するかを検証している。日本全国の回答や数多くの要素を考慮した上でも、住まい・コミュニティの質の向上に応じて、居住者の健康状態が良化に向かうことを示唆している。尚、この結果についてはWEB調査だけでなく、活動量計の測定データを活用したフィールド調査においても確認し、因果条件における「非介入性」「強固性」を明らかにしている。</p> <p>最後の第8章では、各章の結論を総括し、住まい・コミュニティにおける健康決定要因の因果構造に関する成果をまとめるとともに今後の課題を明らかにしたものであり、工学的に寄与するところが大きい。</p> <p>よって、本論文の著者は博士(工学)の学位を受ける資格があるものと認める。</p>				
学識確認結果	<p>学位請求論文を中心にして関連学術について上記審査会委員で試問を行い、当該学術に関し広く深い学識を有することを確認した。</p> <p>また、語学（英語）についても十分な学力を有することを確認した。</p>			